

(2) Non-endorseable and Non-refundable

NAIG 山室信弘

標題は訳せば無保証、無償還ということになるのか。これは核データのことではない。私が今度サンタフェに旅立った時、持参していた航空券に捺されていた文字なのである。もっとも核データの中にも無保証なものがないとは言えない。保証付きデータを揃えてゆくのがわれわれの責任であると言えなくもない。

実は私のサンタフェ核データ国際会議への参加記事は、既にNAIG社内報に記載済みなことと、私に加えてもっと優れた報告が同時に核データニュースには載るらしいので、初めからちょっと脱線気味の報告にしようと思いついたのである。

アメリカへはシャトルで入り次の中継地はデンバー。ここで別のルートで先に着いていた新婚早々の柴田さん夫妻に出会った。(その時はお二人が新婚ほやほやであることは知らなかったのだが。)ところがその柴田さん夫妻と私の三人、つまりそこにいあわせた日本人だけが、飛行機の出発ゲートの変更気付かず予定した便に乗り損ったのである。変更は何ら掲示も行なわれず、(聞き逃がしたのだから確認できないが、)ただアナウンスされたものであろう。幸い4~5時間の遅延はあったもののアルバカーキー午後11時発サンタフェ行きの最終のリムジンに間に合せて、翌日は何食わぬ顔で予定通り朝から会議に参加したのである。おかげで柴田さんの新妻である洋子さんとも顔見知りになれたのであった。

私は過去にこの種の会議にワシントン(1975)、ハウエル(1978)、アントワープ(1982)と参加してきたが、その三回はいずれも私達が測定した核データの発表の場所であった。そのため自然に外国での同業者、RPIのBlockは別格だが(私はRPIに一年滞在している)例えばORNLのHarvey, Macklin, KFKのWisshakらが言葉を交わす相手であった。Macklinは米国外で開催される会議には姿を見せない。実直な研究者である彼の一面を表わしており何んとも理解できる。Wisshakは今回100万\$とも言われる高価なガンマ線全吸収型BaF検出器の製作について発表していたが、数年前、まだ学生かなと思われた彼が大分貫録がついて立派な研究者に成長しているのは頼もしかった。ところで今回はガンマ線スペクトルの計算結果をたずさえて参加したので、関心を持ちあえる相手がOhioのGrimes(レベル密度)、LLNLのGardner夫人(ガンマ線強度関数)、ORNLのHetrick(Ni, Cuのデータ評価)らなど少し広がった。

Grimesの14 MeV中性子による構造材核種の陽子及び α 粒子放出スペクトルの測定は、それらの核種の核データ評価に当たって最も頼りにできるデータの一つである。そのGrimesはアメリカ人の中では余り目立たぬ存在のようにも感ぜられるが、上述の優れた実験的業績ばかりでなく、レベル密度については理論にも明るい研究者であることを知って驚いたのである。Gardner,

Hetrickにしてもわれわれよりはるかにキャリアのある核データの計算家であり、このような層の厚さは現在の日本には望めない。ただ例えばHetrickなどは30才位の若さであり、もし日本語が使えるならば、彼の仕事の内容にもう少し厳しい批評を加え得たのではないかと思う。

今残念に思っているのはDukeのKalbachに余りコンタクトしなかったことである。彼女はもう若くはないが美人に属する。彼女が前平衡過程で多くの仕事をしているのは良く知られていることのようにであるが、今まで組織的には前平衡過程を勉強していなかった私はKalbachが女性であることも知らなかった。彼女のポスターの前にはGruppelaarとAkkermansが頑張っていて、三人でわいわい議論をしていた。それまで前平衡過程に関する部分については「貴女まかせ」でGNASHを使っていた私にとって、その時と新しく質問する問題はなかった。ところがサンタフェから帰った後、GNASHコードの前平衡過程を調べる羽目におち入り、いろいろと問題が出てきている。ことに α 粒子放出に関する部分は何を根拠としてプログラムされているのかわからない。これがもし数か月早くこの状態になっていればあの時Kalbachに質問する機会があったのにと悔んでいるのである。

会議最終日、ユーナイテッド(UA)はストに突入した。そして旅行社の女子社員に他の航空会社への乗り換えを断わられた時、私の目に写ったのが、私の持っている航空券に捺されている

「Non-endorable & Non-refundable」であった。今まで何回かの海外渡航にこんな券を持っていたのか、いなかったのか全くわからない。うかつといえどもことにかつな話なのである。いつも温顔のHarveyがやや深刻な顔をして同じ旅行社に現われるのを見たが、ストにあって困惑する当時の事情を良く表わしている。

さてそのnon-endorableな切符をなんとかendorseして旅行を続けることができたのは私の力ではない。RPIの出身者で今ロスアラモスにおり、今回の会議の主催委員の一人でもあるLittle君がいなかったらどうなっていたらだろうか。彼は私からの要請を聞くと、親身になって世話をしてくれ、あちこち電話してとうとうデルタ航空によるニューヨーク行きの席を予約してくれたのである。最終的なendorseは私がアルバカーキーに戻ってそこでUAにしてもらったのであるが、それができたのは事前にデルタへの予約が取れていたからに他ならない。あのいまわしい「Non-endorable & Non-refundable」をこうして他力本願によって克服したのであった。

私の年令のせいか旅行中年令の話が三回も出た。はじめは会議のバンキットの夜。年令など聴いては失礼なのは万々承知なのだが、もうよかろうとMacklinに彼の年令を尋ねた結果、私より2才上とわかった。私にも心強い話で、私の方が若いのだなと感ずることのなんと心良いことよ。二回目はコーネル大学原子力教室。東工大の私のところの卒業生である江本君が博士課程在学中に研究指導者Dr. Clarkは私より一才下であった。そして三回目はニューヨーク市現代美術館のカ

フェテリヤで。明るいうちから小びんのワインで頭の回転が早くなっている(?)ところへ、「I am a 弁護士」と自称するアメリカ人に話しかけられた。いくつかの会話の後彼は50何才だが、お前は45才に見えるという。冗談じゃない、余程軽く見られたかなと思ったけれど、「15年も年をセーブできてありがとう。」と答えておいた。

こうしてサンタフェ核データ国際会議は無事終了したのだが、はじめにお断りしたように大分脱線して、会議の報告というよりは、私の体験記、失敗談の報告になってしまった。ご容赦願いたい。次の東京ないしは東海核データ会議に向けて、保証付き核データが日本からも一杯提供されることを祈りつつ筆を措く。